

『クリソルド』について

Clissold (1927)

ジョン・メイナード・ケインズ*

訳：山形浩生†

2020年9月13日

概要

H.G. ウェルズ『ウィリアム・クリソルドの世界』は、すでに多くの書評もあるがどれもピントはずれ。この本で取り上げられている重要なテーマの一つは、寿命の延長とそれに伴う高齢化だ。世界は物質的には急変を遂げているが、高齢化により人々は保守化し、権力者たちは創造より安定を求めるようになる。ウェルズはこの問題を見事に指摘する。では、その新しい世界を創る革命の仕事は誰がやるべきか？ 現在の左派は感傷的で非論理的だから何も期待できない。右派の科学者やビジネスマンに期待したいところだが、彼らは政治などに興味を持たない、というのがウェルズの主張だ。思うにそれは右派に信条がないからで、お金は単なる代用動機でしかないからなのだ。それが現代の大きな問題だ。『クリソルド』はこうした重要な現代の課題を描き出した見事な作品である。(要約：訳者)

|

ウェルズ氏とその出版社は、見事な手腕を弄して、彼の最新作*¹が三回も書評されるよう取り計らったので、こんなに遅くなってからこの本について改めて何か書くというのはやりすぎかもしれない。だが書評を最初に読んでから実際の本を読んだ身としては、専門書評家たちが物言いに對して、きわめて不満を抱いたのである。現代の批評家たちの弱点として、分別がない あるものと別物との区別がつかないのである。ウェルズ氏の選んだ形式ですら、書評家たちを混乱させている。彼らは、ウェルズ氏が何を問題にしているのか見てとれずにいる。イギリスの社会に提供された見事なピーフを拒絶するのだが、その理由というのが、マトンは絶対にウェルダンで出さねばならないから、というものだ。あるいは彼らの繊細な批判は、ウェルズ氏の余りある八面六臂の活力に向けられたり、何十万人もの読者に注目されて、その精神を先に進めるはずの、大きなキャンパスを彩る筆遣いの広さと荒々しさに向けられてしまっているのだ。

この本でウェルズ氏は、彼の個人的体験と生活方針に基づいて発達してきた自分の考えを厳密に述べているわけではなく、視点を変えて、自分とはかなりちがった体験に基づいた観点、つまり成功した開明的な、半科学的で、ことさら意識が高いわけでもない、イギリスのビジネスマンの観点から書いている。結果は、もっぱら芸術作品ではない。その中身は形式ではなく、アイデアなのだ。これは教育的な文書だ お望みならプロ

* 著作権消滅

† ©2020 山形浩生 hiyori13@alum.mit.edu クリエイティブコモンズライセンス 表示 4.0 (<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>) 禁有断転載、有断複製。

*¹ *The World of William Clissold* 全三巻

パガンダと言ってもいい。世間の中でもごく少数の人々に派すすである程度お馴染みの心構えを、非常に大きな世間に対して伝えようという試みなのだ。

本書はごたまぜだ。私は経済っぽい主題としてあらわれてくるものを二つ選ぼう。その二つ以外で主要な話題の一つは女性であり、現代社会において、女性同士およびクリソルド的な男性に対する現代の関係として考えられるものだ。これはきわめて率直に、共感と洞察をもって扱われている。それは苦い後味を残すし、それは意図的なものだ。

II

私が扱う主題の最初のもは、保守主義に対する激しい抗議となる。変化の必要性和その速度についてのこだわりをもった強調、過去を振り返る愚かさ、適応不能の危険性などだ。ウェルズ氏はものすごい過去と未来について考えることで、ほとんど彼の初期の小説とも近い奇妙な感覚を生み出している。これにより彼は、遅さの印象を与えている（永遠で急ぐ必要はない）が、現在に近づくにつれてタイムマシンを加速するので、現在の私たちはすさまじい勢いで旅をしており、もはや何百万年もかけて方向転換はできないように感じさせる。私たちの生活における保守主義的な影響は、すぐ目先に文字通りの絶滅が待ち受けている恐竜として描かれている。対比は私たちの思想や習慣、偏見が、物質的な変化の速度に追いつけないことから生じている。環境は私たち自身よりあまりに高速に動く。移動用コンパートメントの壁が私たちの頭にぶつかっているのだ。私たちが大急ぎにならないと、交通にひき殺される。保守主義は自殺と似たり寄ったりだ。我らが恐竜たちは大弱り！

これが一つの側面だ。私たちは、静止すれば自らを危険に曝す。光陰矢のごとし。しかし同じ事の別の側面がある。そしてここにクリソルドが登場する。活発なキャリアに没頭して時代とともに進む現代人にとって、もの見方や暮らし方の面で静止するなんて、なんと退屈なことか！ ロンドンが成功に対して与えてくれる、お祝いや祝宴は何と退屈なことか！ 異議を失った社会的な仕草だの、もはや喜びをもたらさない伝統的な娯楽をやらされるのは、何と退屈なことか！ 現代商業の寵児による過剰な建設的な活動と、業務時間外でそうした人物が過ごせる適切な環境の欠如とのコントラストはすさまじいものだ。さらに、お金儲けのキャリアには、まったく不毛で非建設的な長い時間がたくさんある。第一巻には、都会人の深遠で究極的な退屈に関する見事な下りがある。クリソルドの父は企業プロモーターで投機家だが、まずはメガロマニアに陥り、それから詐欺に手を出す。それは彼が退屈していたからだ。したがって、社会生活の可塑的な材料に両手を突っ込んで、それを私たち自身の現代的なイメージに形作ろうではないか。

私たちは単に末法の世に生きているだけではない。私たち自身は、成熟して力を持つ年齢においてご先祖たちより文字通り高齢なのだ。ウェルズ氏は現代生活の、あまりに無視されている特徴を強力に打ち出してくる。つまり、私たちが以前よりずっと長生きして、さらに重要な点として、健康と活力を、それまでは衰退するしかない人生の時期にまで引き伸ばしているという点だ。これにより、平均的な人間はいまや、これまでは例外的な人物しか期待できなかったような活動時間の長さを期待できるのだ。実際、私はウェルズ氏が見すごしている（と思う）さらなる事実をつけ加えられる。それはいまの事実を、過去五十年よりも今後 50 年でさらに強調することになるはずだと思うものでもある。それは、急増する人口の平均年齢が、定常人口よりもずっと低いということだ。たとえば、今後 2 世代の過程で近づきたい安定状態の中で、私たちはいささか急速に、対人口比で高齢者（たとえば 65 歳以上人口）が 100 % 近く増えるようになり、中年（たとえば 45 歳以上）は近い過去より 50 % 近く増えるような状況になる。19 世紀には実質的な権力を持つ人物は、16 世紀に比べて 15 歳以上ほど高齢になっていただろう。そして明らかな心身の衰え以外にトップの座に空きを作る有効な

手段が見つからなければ、権力者の平均年齢は 20 世紀が終わるまでにさらに 15 年増えるかもしれない。クリソルド (ちなみに 60 歳) は、この状況について、私に比べ、欠点よりは利点のほうを多く見出している。ほとんどの人は年を取るにつれて、創造とモノ作りよりも、お金と安全を好むようになる。そしてこのプロセスは、詳細に関する知的な判断力がはっきり衰えるはるか以前から生じる。青臭いセックスまみれの世界よりは大人の世界を好むというウェルズ氏の嗜好は、正しいのかもしれない。だがこれと、中年のお金ばかりに動かされる世界との世界の境界は実に狭い。私たちは最善でも、しっかりした肉体を持つ「引退者」たちというろくでもない問題に脅かされている。これについては当のウェルズ氏が、リヴィエラによくいる居住者に関する悲惨な描写という形で、たっぷり実例を挙げている。

つまり私たちは、すさまじく急速な遷移の不満足な時代に暮らしており、そこではほとんどの人、中でも最先端にいる人々が、自分とその環境がお互いによりかみ合っておらず、したがって洗練さに劣る先祖たちや、はるかに洗練されるであろう子孫たちに比べてもはるかに不幸となっている。この診断は、ウェルズ氏に行動という実務的生活に従事している人々に適用されているが、エドウィン・ムイア氏のきわめて興味深い批評集『移行の時代』で芸術と思索の世界にいる人々に適用されているものと基本的には同じだ。我々が最先端の著作家たちは、この世界で居心地が悪い 何かを全面的に支持することも、全面的に反対することもできないので、結果としてその作品は、彼らの才能に比べれば、もっと幸福な時代に作られたものとの比較で劣ったものになっている 貧相で、不完全で、やせ衰え、血の気がなく、まるで彼ら自身の宇宙に対する気持のようなのだ。

要するに、私たちはここにとどまるわけにはいかない。私たちは移行しつつある 移行といっても、必ずしも良い方に向かっているのか悪い方に向かっているのかはわからないが、とにかく別の均衡には向かっている。だが、なぜ良い方であってはいけないのか？ 物質的な性仏から、精神的な果実を獲得し始めてもいいのではないのか？ もしそうなら、望ましい変化に向けた動機はどこからやってくるのか？ これで話はウェルズ氏の第 2 の主題にやってくる。

III

ウェルズ氏は『クリソルド』第一巻で、主人公の社会主義に対する幻滅を描く。第 3 巻で、別の道がないかを探究する。私たちはどこから「法律や習慣、ルール、制度を変える」力を得るべきなのか？「革命家はどの階級や人間のタイプからやってくるべきなのか？ どうやって彼らを協力させるべきか？ 彼らの手段とはどんなものであるべきか？」労働組合運動は、破壊のすさまじく危険な力として表されており、それを率いるのは「思想の代わりに感傷しか持っていない」、おセンチ主義者やえせインテリどもでしかない。こんな連中に建設的な革命が考案できるはずもない。人類の創造的な叡智は、こうした連中の中には見つからず、科学者や偉大な現代のビジネスマンの間に見つかるはずだ。革命の仕事をこうした種類の精神や性向や気質に任せられない限り、絶対に実現するはずもない というのもそれは、実務的にすさまじく複雑であり知的にも困難だからだ。したがって、革命家は左派からではなく右派からリクルートしなければならないのだ。現在では大企業を造り上げるのに魅力を感じるような人々に、もっとおもしろいさらにでかい話があるのだと説得しなければならない。これがクリソルドの「公然たる陰謀」だ。クリソルド自身は左翼よりだ 極端に左よりだ。でもそこに自分を導いてくれる、想像力と建設的な意思を右派から召喚しようとするのだ。彼は自分自身が、気質的にも根本的にもリベラルだと述べる。だが政治的リベラリズムは「もっとしっかりした特徴ともっと明晰な意思を持って生まれ変わる」ために死なねばならないのだ。

クリソルドは、社会主義者たちすら含む実に多くの人々が感じている、社会主義正統への反動を表明してい

る。世界を形成しなおすためには、創造的なブラフマンの一触れが必要だ。だが現在のブラフマンは、科学とビジネスに奉仕しており、政治や行政には携わっていない。世界が直面する極端な危険とは、クリソルドに言わせると「創造的なブラフマンが仕事にかかる前に、シバ、つまりいまや自分たちの直面する無用な制約や欠乏に目覚めた労働の情熱的な破壊力が、ブラフマンの仕事を不可能にしてしまうかもしれない」ということだ。たぶんみんなこれは感じていることだろう。だれしも、ブラフマンが手遅れになる前に仕事にかかるような状況を急いで作り出さねばならないのは知っている。したがってあらゆる政治的派閥の活発で建設的な気質の持ち主たちは、この公然たる陰謀に加担する用意があるのだ。

では、何が彼らを抑えているのだろうか？ 思うに、『クリソルド』がいささか不十分で、明らかに洞察を欠いているのはこの部分だ。どうして実務的な人々は、この公然たる陰謀に参加するより、お金儲けのほうがおもしろいと思うのだろうか？ 私が思うに、それは彼らが日曜日に、教会に行くよりブリッジをやるほうがおもしろいと思うのとほぼ同じ理由なのだ。彼らは、もし持っているのであれば信条を持つとでも表現されるような動機を、まるごと欠如させているのだ。こうした潜在的な公然の陰謀者たちは、信条がない。まったく何一つないのだ。だからこそ、科学者や芸術家になるという幸運に恵まれない限り、彼らは大いなる代替動機、完璧な代用品、実はまったく何も欲しがらない人々のための鎮痛剤、つまりお金を求めるのだ。クリソルドは労働運動の情熱家たちが「思想の代わりに感傷」を持つと糾弾する。だが、彼らに干渉があることは否定しない。ひょっとすると哀れなクック氏は、クリソルドに欠けている何かを持っているのではないだろうか？ クリソルドとその兄である広告専門家ディクソンは、世界中をとびまわり、そのあふれるリビドーを接続できる何かを探し求めている。だがそれを見つけられずにいる。彼らは本当に使徒になりたがっている。だがなれない。ビジネスマンのままだ。

私は、何十もの主題を持つ本から、二つだけを選び出した。その何十もの主題がすべて同じくらい上手に扱われているわけではない。大学についてはウェルズ氏よりずっと詳しい人間としては、彼の描くものが、戯画化できる程度の真実しか含んでいないと断言できる。彼はその可能性を過小評価している。まだシヴァですら敬意を払うほどのブラフマンの神殿となる可能性を彼らが秘めている点を理解していない。だが全体として『クリソルド』は見事な成果であり、巨大で濃厚な卵として、そこから見事な二ワトリ、つまり正真の心からの寛大な精神がたっぷりあふれてくる作品となっている。

いまの人々はかつてないほど純粹芸術の話をするが、純粹芸術家にとって現代はよい時代ではない。また古典的な完璧主義者にとってもよい時代ではない。今日の最も豊穡な作家たちは、不完全さにあふれている。彼らは自分たちを他人の判断に委ねる。不道徳になろうとはしない。こうした理由から、ひょっとすると彼らの同時代人たる私たちは、そうした芸術かと彼らからの借りについて、不当な扱いをしているのかもしれない。あらゆる知的存在は、どれほどバーナード・ショーに借りを負っていることが！ また、H・G・ウェルズにもどれほど借りを負っていることが！ 彼の精神は読者と並んで成長し、その結果として彼は一節毎に私たちを喜ばせ、私たちの想像力を少年時代から成熟へと導いてくれたのだ。